

# 教員は語る

第五回

― 芸大への期待・抱負・提言 ―

## 音や光の原理に立ち返る

― 佐藤先生は芸大の卒業生でも、今まで教壇に立たれたこともなかったわけですが、東京芸術大学にどのような印象をお持ちだったのでしょうか。

**佐藤** 芸大は、努力の範囲で入ることができる東大や慶応と違って、少なからぬ「天賦の才」を与えられた人たちが集まるところで、自分とは関係がない真の意味でのエリート、選ばれた人の集団だと思いませんでした。

まだ社会人になったばかりのころ、晴海で行われていたオーディオ・フェアの展示ブースを担当することになって「増殖する壁紙」という新しいデザインのポスターを企画したことがあるんです。自分の意図を理解してくれる人は、はたしているのだろうかと思ったときに、芸大生に藤幡（正樹）くんという人がいるので、おもしろそうだから会ってみないかと言われて会

# 佐藤雅彦

教授 | 大学院映像研究科 (メディアデザイン)

×

# 山下薫子

助教授 | 大学院音楽研究科音楽文化学 (音楽教育)

ったのが、芸大の人との最初の出会いです。そのときに僕が先入観で持っていた芸大とは違うのだと思いましたね。

まだメディアアートという言葉は、もちろんなかったんですが、数学や物理や工学に素直に面白がる藤幡さんを見て、そこに接点を見出したのです。そこから藤幡さんの仲間である、谷口広樹さん、佐藤卓さん、その後、日比野克彦さんという芸大の人たちとも知り合いになっていきましたね。

― 山下先生はこのたび開設された千住キャンパスの大学院音楽文化学専攻に関わっていかれます。ご専門の音楽教育についてまず紹介いただけますでしょうか。

**山下** 「音楽教育」の特徴は、「二足の草鞋」を履いた人たちの集まりだということです。

大学院にのみ設置されている講座なので、学部専攻で培った専門性を生かしながら音楽教育を見ていくということになります。同期には、長唄三味線の人や声楽の人などがいて、それぞれの専門的立場から意

見を戦わせることができ、興味が広がりました。最近では、楽理科出身の人たちを中心に、すぐれた研究方法を身につけて入学してくる人が多いように感じます。

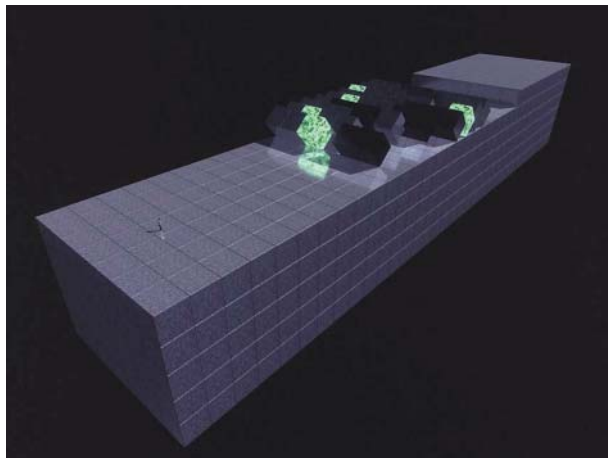
私の場合、入学当時はピアノ指導についての研究をしようと思っていましたので、学校教育という限定された場での音楽教育だけではなく、プライベート・レッスンを含めた、より広い視野から教育を見てみたかなと思っていました。

― 佐藤先生も新しくできた新港校舎のメディア映像に教授として着任されました。

**佐藤** 僕は、メディア映像専攻のなかでもメディアデザインを担当しています。藤幡さんがメディアアートを担当しているのですが、今は専攻の枠を越えて四人の教員全員で学生全員を教育しているという状況です。

いくつか自分なりのカリキュラムを組んで学生を指導しているのですけれども、最近、ひとつの課題として「原理 (principle)」というテーマを取り上げました。いろいろな科学技術を用いると、それなりに新しそ





“I.Q.” (Intelligent Qube)  
©Sony Computer Entertainment



佐藤雅彦（さとう まさひこ）  
教授——大学院映像研究科（メディアデザイン）  
一九五四年生まれ。東京大学教育学部卒業。電通のクリエイティブ局を経て、九四年独立。九九年から慶応義塾大学環境情報学部教授。二〇〇六年四月から現職。九一年クリエイター・オブ・ザ・イヤー賞、九〇年ADC最高賞、九八年文化庁メディア芸術優秀賞、〇六年スロバキア・ドナウ賞、プリ・ジュネス賞、日本賞、受賞。

に飾ったり、にぎやかに音楽をつくったりはすぐできるのです。でもよく見ると、単にLEDのつけ方を知っているとか、音の鳴らし方を知っていただけではなにか。やはり物事の原理である「音が何なのか」「光が何なのか」ということを知らないと、ものの新しい関係性を生むことができない。

みんな手はすぐく達者で、整えることがすぐく得意なんですよ。でもそれでは器用なだけで新しいものを生み出すことはできないのではないかと。そこで「原

理」に戻って考えましようということですね。

山下 音楽教育の本質はまさにそういうところにあるのだと思います。合唱や合奏など、ある型を学び吸収していくというベクトルが大切である一方で、音そのもの、あるいは音を通して感じられるリズムそのものに向かっていくというベクトルも必要だと、つい先日のゼミで議論したばかりです。とくに、幼い頃からピアノやヴァイオリンを習ってきた人には、無意識のうち身に付いてしまった西洋音楽の型というものがありますので、それを解きほぐし、原点に戻ってみるというプロセスがとても大事だ、と今お話をうかがっていて思いました。

幼い頃からの積み重ねというのは怖いもので、学生時代は、楽器の練習が食事をとることと同じように当たり前になっていました。だから「音楽が好きですか？」と改めて問われると「食事をとることが好きですか？」と聞かれるのと同じような違和感を覚えたのですね。「音楽する自分」を対象化して見ることの難しさは、こうした感覚によるのではないかと思います。

## 「わかる」ということの本質

——佐藤先生は映像の表現者として音楽についてどのように考えていますか。

佐藤 僕は、音が世界を支配する、音が映像の世界観を決定すると思っています。ですから僕がつくる表現は全部とっていいほど音からつくりまします。

音は時間ですから、音を管理すれば時間を管理できるんですね。僕がつくる映像は機能的なものが多いので、時間も決められていることがほとんどです。ですからそれを制御するのに音を使います。音楽が持っている力は要素還元できないですし、人をどうしてそんな気持ちにさせるのかとか、今もって解明できないんですが……。

僕は、表現というものに興味を持つ前に、もともと教育というものに非常に関心があつて、それは教室というメディアだけでなく、DVDやCDROMや、テレビやインターネット、携帯というメディアでもいい。あるいは新聞や本のような紙のメディアでも、そういう何かある媒介を通してだれかとコミュニケーションをとり、こちらの意図を伝えるということにすごく興味がありました。そのときに初めて表現という必要性が生まれたのです。そして、音に対する関心も同時に生まれました。

テレビCMの十五秒という与えられたメディアでも、何で最初にこの音が来ると、皆が一秒ぐらいでこっちを向くのだろうというようなことにすごく興味があつたんです。ある音を出すと、お茶の間やリビングがこの画面に釘づけになる。そこを支配するのは全部音なんですよ。

普通の人はテレビを見ることにおいては、お茶の間のプロと呼んでいいほど日々、習熟しているので、形骸化した表現を好むわけではなくて、新しいものを見分けたり、聴き分けたりする力が実は、ある。だから



業していたこともあって、音楽を私と同じようにとらえている人ばかりではないという問題に直面しました。そして、「音楽とは何か」という根本問題を多面的に語れるように勉強し直す必要が生まれました。

たとえば、さきほどCM音楽のお話ができましたけれども、言葉も音楽と同じようにリズムをもっているし、抑揚をもっています。この点を活かすことによって、音符に苦手意識をもっている人からも、生き生きとしたリズムの表現を引き出すことができました。

また、現在の学校教育では「ダンス」が体育の一領域に位置づいているのですが、「音楽とともに動く」とは、音楽の本質を体で感じとる上で欠くことのできない重要な活動なんですね。

そのほか、理科に興味をもっている人ならば、音そのものの原理に立ち返ってみるということも可能でしょう。たとえば簡単な楽器をつくって発音原理を探ってみたり、振動数と音の高さの関係を調べてみたりするのはです。

このように音楽をさまざまな方法で提示するという技術は、音楽教育を専攻しなければ身につかなかっただろうと思っています。

## 視点を变えて捉えなおす

——両先生ともに着任してまだ数ヶ月ですが、芸大で教壇に立たれた感想と、今後なさらりたいということがありましたら最後にお聞かせください。



佐藤 この前「新しさの蒐集」という課題を出したんです。それはまだ世の中に言語化されていない、体系化されていない新しいおもしろさ、美しさで、自分だけが引かかっているものがあるんじゃないかと思うんです。それを言語化して発表しなさいという課題でした。そういうことを毎日やっている。だから毎日開拓なんです。何が出てくるかわからない、それがごくおもしろいですね。

藤幡さんが開講のときに生徒を集めて「芸大は来年百二十年を迎える。でもこの新しい芸大は今一年目で、伝統も新しさも両方があるところだ」とおっしゃったんです。百二十年目でも一年目。それをすごく表わしていると思います。だから学生も新しい伝統をつくるという心構えをしていますね。

山下 芸大で勉強している人たちは、その多くが「表現のプロになるんだ」という意識をもっていると思います。毎日、何時間もかけて表現技術を磨いているわけですから、当然ですね。しかし、その一方で「鑑賞のプロ」としての自分も磨いてほしいというのが、私の願いです。これは、先ほども申し上げた「視点を变えること」の大切さによるものです。

数年前、イギリスのシェフィールドという田舎町に住んでいたとき、チャリティでリサイクルをさせていただく機会を得ました。主催者側の尽力で、とんとん拍子に話が進んだのですが、いざプログラムを決定する段になると、これがなかなかまとまらないのです。私が演奏したい曲目のリストを送ったところ、「聴き手

のことをもつと考える」と再考を求められたからです。チャリティというのは、同じ志をもった人たちが集まってきて、自分のできる限りのことをするところだから、演奏する側も聴く側も、互いのことをよく知らなければいけないということなのですね。

考えてみれば当たり前のことだったのですが、当時の私にとっては目からうろこの感がありました。そして、音楽教育研究に携わるものとして恥ずかしいと思いました。「相手の側に視点を移して考えること」は、教育の原点でもあるからです。

大学でのレッスンや授業で教わる内容は、決して表現技能にかかわるものだけではないはずですが。アナリゼにしても、ソルフェージュやスコア・リーディングにしても、楽譜から音楽を読み取り、頭の中で響かせる技能を習得するためのものですから。そもそも、演奏というのは、高度な技能をとまなう積極的な鑑賞活動なのだと言ったこともできるわけですね。

この考え方をもう一歩押し進めて、聴き手の側に視点を移して自分の表現をとらえなおすことはできないだろうかということですが。そうすることで、音楽する自分の姿がよく見えてきます。そして、「自分は、音楽表現のプロである前に、鑑賞のプロなんだ」と感じられるようになったとき、その人はすでに、音楽教育者としての第一歩を踏み出していると考えられます。そんな真の教育者が芸大から一人でも多く輩出することを願って、日々、教育・研究活動に携わってゆきたいと思っています。

山下 薫子（やました・かおるこ）

助教授——大学院音楽研究科音楽文化学（音楽教育）

東京芸術大学音楽学部器楽科（ピアノ専攻）卒業、同大学院音楽研究科（研究領域：音楽教育）修士課程修了、同博士

後期課程満期退学。静岡大学教育学部講師、同助教授を経て、二〇〇六年四月から現職。二〇〇〇年五月から五ヶ月間、

英国シェフィールド大学研究員。主な論文は「リトミックは音楽の知覚をどのように変えるのか」（『リトミック研究の現在』）、"A Case Study on the Formative Process of Musical Imagery"（APSMER 2005）など。